

Professional Institute of International Fashion

国際ファッション専門職大学

2025年度・第2回公開講座@ZOOMウェビナー

独創と模倣の問題圏

—— 文芸作品から考える ——

参加無料

参加のお申し込みは、下記URLより受付中です!
※QRコードからもアクセス可能です。
申し込みフォーム▶<https://x.gd/AU9s6>



2026 3.28 SAT 10:00 ▶ 11:30

本発表は、漫画『ハチミツとクローバー』と夏目漱石『夢十夜』第六夜等の文芸作品を手がかりに、芸術における「独創」と「模倣」、そしてそれを支える「自我」のあり方を考察するものである。両作品は約100年の隔たりがあるが、創造性の源をどこに求めるかという共通の問題を描いている。

『ハチミツとクローバー』では、美大生の竹本が、才能ある同級生や先輩と自分を比べ、創作にも就職にも行き詰まる姿が描かれる。彼は「自分の中に何も無い」と感じ、自分探しの旅に出る。一方、天才的な才能をもつ人物たちは、自分を疑うことなく制作を続ける。この物語では、創作の源泉は「自己の内面」にあると考えられており、それを見いだせないことが若者の不安として描かれている。

漱石の『夢十夜』第六夜では、運慶が仁王像を彫る場面が描かれる。運慶は木の中にすでに仁王が「埋まっている」かのようになり、それを掘り出すだけである。しかし、同じことをしようとした明治時代の主人公には、それができない。主人公は「明治の木には仁王が埋まっていない」と悟るが、これは近代において、模範となる「型」や理想が失われたことを象徴している。

かつての芸術は、自然や理想的な型を模倣することで成立していた。しかし18世紀後半以降、ロマン主義の影響により、模倣の対象は外部から内部へと移り、「独創性」や「個性」が重視されるようになった。その結果、人は自分自身の内面に創作の源を求めるようになるが、そこに確かなものが見つからないという矛盾が生じる。

言いかえるならば、外部の模倣対象の喪失以降、文学・芸術は独創を探し出そうとする内面的源泉に、確固たる固有の自我を見出すことは本質的に困難だということである。『ハチミツとクローバー』が多くの若者の共感を集めたのは、まさにこの矛盾が、芸術の枠を超えて、今もなお私たちの身近な問題として生き続けているからだと言えるだろう。本発表で扱うのは、この独創と模倣の問題圏についてである。



Speaker ◀ 東 ゆ み こ Yumiko Higashi

(国際ファッション専門職大学 国際ファッション学部 ファッションビジネス学科教授)

文筆家・文化批評家。博士(学術)。古代神話・仏教から現代ポップカルチャーまで幅広い領域を横断し、「違和感」を起点に文化現象の深層や精神構造を読み解く独自の研究を展開。比較神話学、古代と近代のイニシエーション論、自我論、動物と人間の関係の変化など、神話的思考を基盤とする農村型社会から都市型社会への変容にもなる現象について多角的なテーマを考察している。主な著書に『クソマルの神話学』(青土社)、『猫はなぜ絞首台に登ったか』『大人のための仏教童話』(光文社新書)。監修書に『世界の神々がよくわかる本』『ギリシャ神話の教科書』など。NHK『チコちゃんに叱られる』出演やメディア寄稿も多数。

開催者:国際ファッション専門職大学 広報委員会